教授・学習 4 (619~625)

座長 今井靖親 佐伯 胖

- 619 物語のもつカメラ・アングルの記憶について
(Ⅱ)
国立教育研究所 上野直樹
- 620 論理的課題におけるプラグマティックな推論と視点
国立教育研究所 上野直樹
慶応義塾大学○難波和明
東京大学 佐伯 胖
- 621 因果認識における文脈効果に関する実験的研究
東京大学○佐伯 胖
服部 慈
- 622 文章の保持におけるオーガナイザの役割
愛知教育大学 谷口 篤
- 623 物語理解における挿入質問の効果
——精神遅滞児と健常児の比較——
徳島大学 光田 基 郎
- 624 情報の読みとりと統合化(その1)
——幼児における目標構造の把握を中心として——
山形大学○高木 和 子
九州大学 丸野 俊 一
- 625 幼児の文理解に及ぼす絵の効果
奈良教育大学 今井 靖 親

質疑応答・討論の概要

619(上野)・620(難波)の発表は、当日午前中に行われた自主シンポジウム「理解における領域の拡大と深化」(企画者 佐伯)において若干紹介されていたので、自主シンポジウム時の発表内容とからめた質問が多かったようである。

619(上野)に対し、中野(北大)から、視点のとりやすさに関して、読み手の個人差、とくに、物語の登場人物のキャラクターとの交互作用があるのではないかとの質問があり、上野は、読み手が文章に対して何を focus とし、どのような情報を given, new と定めるかによって視点が変るのであり、単なる性格上の相性ではないと考えるという答えがあった。

620(難波)に対しては、小野寺(熊本大)、福田(筑波大)より、4枚カード問題において「規則があてはまる」ということを「規則が」(カードの状態の記述に)「あてはまって」いるか否かとして解釈するか、「カードが」(与えられた規則に照らして)正しく「あてはま

って」いるか否かを問題にしていると解釈する場合とで、結果が異なるのではないかという主旨の質問があった。それに対し、難波、上野より、規則そのものを吟味の対象とする立場は現実にはとり難い状況であること、また、他の実験ではそのような解釈が不可能な表現でも同様の結果が出たとの答えがあった。堀(長岡短大)より、プラグマティックという表現の適否について質問があったが、難波は形式論理に従わぬ推論の可能性を示すためと答えている。

621(佐伯)へは、丸野(九大)より「文脈」とは何を指すかという質問があり、佐伯は、抽象的な記述に具体的意味を与え、明示されていない可能性へのイメージを促すものを「文脈」とよぶと答えた。

622(谷口)に対して、田中(筑波大)、池田(筑波大)堀らから、オーガナイザー効果の実験的検証方法についての Barnes & Clowson の批判に対して、本研究では十分な配慮がなされていたかについての活発な討議が行われたが、谷口より、本研究での諸条件が批判を回避しうる旨の弁明がなされた。

623(光田)に対し、高木(山形大)より被験者を選ぶ際の基準についての質問があり、CAにはバラつきが多いのでIQを測度として実施したとの回答があった。

624(高木)に対し、幼児の目標構造をとらえる際に、event の原因系の把握と主人公の意図の把握の重要性をどう考えるか(お茶大、内田)、作品からの情報以外の日常経験をもとにして推察をどうするのか(日女大、村中)という質問があった。高木は、目標構造の読みとりとみなしうる全てのものについて分析していると答えた。また、立木(茨城キリスト教短大)より、幼児に理解可能な物語を、わざと理解しにくい材料に変えて研究することへの疑問が出されたが、高木から、この研究では子どもの物語理解を明らかにしたいためにこのような方法をとった、との釈明があった。

625(今井)に対し、馬場(茨城大)より、情報量としては文と絵は加算的になっているのだから、絵があった方が文の理解度がよいのは当然ではないか、との疑問が出された。これに対し今井は、文と絵では情報の質が異なるので、絵は必ずしも文に加算的な情報として機能しないと考える、その点を検討するための実験であるとの説明があった。

(今井靖親・佐伯 胖)